

歴代誌第一 22 - 26 章 「ダビデの神殿準備」

1 A 着手の呼びかけ 22

1 B 材料の調達 1 - 5

2 B ソロモンへの激励 6 - 16

3 B イスラエルのつかさへの命令 17 - 19

2 A 礼拝奉仕の組織作り 23 - 26

1 B 奉仕者登録 23

1 C 奉仕者の人数把握 1 - 5

2 C 家系による組分け 6 - 23

3 C レビ人の働きの調整 24 - 32

2 B 祭儀 24

1 C アロン系祭司 1 - 19

2 C その他のレビ人 20 - 31

3 B 讚美 25

1 C 歌と預言 1 - 8

2 C 二十四の組分け 9 - 30

4 B 執事的奉仕 26

1 C 門衛 1 - 19

2 C 宝物倉管理 20 - 28

3 C 外の仕事 29 - 32

本文

歴代誌第一 22 章を開いてください。ここから、サムエル記第二や列王記第一には記されていないが、歴代誌第一における重要な箇所に入っていきます。神殿礼拝のための準備をダビデが行う箇所であります。

1 A 着手の呼びかけ 22

1 B 材料の調達 1 - 5

22:1 そこで、ダビデは言った。「これこそ、神である主の宮だ。これこそ、イスラエルの全焼のいけにえの祭壇だ。」22:2 そして、ダビデは命じて、イスラエルの地にいる在留異国人を召集し、神の宮を建てるため石材を切り出す石切り工を任命した。22:3 ダビデは、門のとびらの釘および留め金用の鉄をたくさん用意し、青銅も、量りきれないほどおびたく用意した。22:4 また、杉の木も数えきれないほど用意した。シドン人とツロ人がダビデのもとに杉の木をおびたく運んで来たからである。22:5 ダビデは言った。「わが子ソロモンは、ま

だ若く力もない。主のために建てる宮は、全地の名となり栄えとなるように大いなるものとしなければならない。それで私は、そのために用意しておく。」こうして、ダビデは彼が死ぬ前に多くの用意をしておいた。

前回の学びで、ダビデが人口調査の罪を犯し、そして主の使いによって、ダビデの町の北にある、オルナンの打ち場のところに行け、と命じられます。そこでダビデは、主のための祭壇を築き、全焼のいけにえと和解のいけにえを捧げました。そのいけにえが天からの火によって、焼き尽くされました。主が受け入れてくださったのです。このことでダビデは、「これこそ、神である主の宮だ。」と悟ったのです。

ダビデにある、この悟りと感動は、午前礼拝でも話しましたが、主がモーセを通して約束の地について、約束されたことに基づくものでした。「ただあなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。（申命 12:5）」モーセが死ぬ前に、イスラエル人たちに語った主の言葉である申命記には、主がご自分の御名を置き、住まいとするために一定の場所を選ぶことを、何度も教えています。新改訳聖書では合計 17 回出てきます。これまでは、イスラエルは旅をするために、移動可能な幕屋による礼拝をしていました。けれども、敵からの攻撃がなくなり、約束の地で安住できるようになったら、主ご自身が選ばれたところで御名を現し、民がそこにいて主を礼拝して、そこを中心にして国民生活を送ることを教えていたのです。

当時は、神の箱以外のもの、祭壇などはすべてギブオンにあったのですが、オルナンの打ち場に主の使いが導いたことによって、まさに、こここそが主の選ばれた場所であることを悟ったのです。ダビデは、外敵と戦いながら、その分捕り物を取りながら、金銀は聖別して主に捧げていました。そして今、人々が安住することができるようになってから、この事件をきっかけに、神殿建設の準備を一気に加速化させたのです。

ソロモンは、ダビデが高齢の時に生まれた子です。まだ年が若いです。もちろん、こんな大事業のための経験もありません。そこでダビデは、じっくりと神殿建設のための準備を取ったのです。ある韓国人の牧師さんとの会話を思い出します。彼はもちろん、北朝鮮体制に反対であるし、韓国人の中でも保守的な考えの人です。けれども、面白いことを話していました。北朝鮮の父、金日成の後に金正日に権力が移譲しても体制が崩れなかったのは、正日が幼少のころから息子への権力移譲のための準備をしてきたからだ、と言っていました。だから、後継者のことを今からしっかり考えないといけない、と言っていました。

私が、今回の学びで個人的に神からチャレンジを受けたのは、「神が与えておられる、先の、また先の LCF に対するご計画を、私は見ているのか？そして、そのご計画のために今、私が応答して準備を始めているのか？」ということです。私の目の前に出てきた、主が与えてくださった伝道や奉仕の機会にはすぐに応答できます。そして、これはいつもしていくべきです。けれども、キリストがこの共同体の中でどのように形造られていくのか、という点について、もっとじっくりと主に聞かねばいけないと思いました。

例えば、まずは、一人一人の構成員が、キリストに救われたのだという信仰を告白できているかどうか、ということ。これをはっきりとさせるために何をすべきか？ということ。次に、キリストを人に紹介することができるか？ということ。キリストのところに人々を導いているかどうか？であります。そして最後に、自分が聖書の教えを聞くだけでなく、他者に聖書を教えることができるかどうか？であります。プログラムのようにしてはいけないと思っていますが、同時にキリストとの歩みをしっかりさせる、何か具体的な試みが必要です。単に、聖書メッセージを聞く以上のこと、教会において聖書の言葉に対する具体的応答を行いにおいて見せていかねばなりません。

本文に戻りますと、この宮は、全地の名とならないといけない、栄えるように大いなるものとしなければならない、とあります。これはなぜでしょうか？午前礼拝で少し話しましたが、ダビデは自分の考えでこのような大きなことを考えたわけではありません。あくまでも、神ご自身がダビデに対して、ご自身の御国をお見せになったからです。それは、イスラエル人だけの国ではなく、全世界の民が、神ご自身の子であるキリスト、王のところに集まり、神を礼拝する御国を意図しておられるからです。イザヤ書 60 章を後で読んでみてください。そこには、主の栄光がとどまるエルサレムの幻があります。そして世界の王たちがその輝きに照らされて歩む、とあります。そして国々がそれぞれの地の産物を携えて、それをエルサレムへ贈り物とする、とあります。さらに、城壁を外国人が立て直し、王たちがエルサレムに仕える、とあります。すべての人がその神殿を認めるのです。これだけの栄光があります。これを、ダビデは自分の子ソロモンに分かち合っていくという志を与えられたのです。まさに、イエス様が祈りなさいと命じられた、「御国が来ますように」ということを信仰によって受け入れていました。

2 B ソロモンへの激励 6 - 16

22:6 彼はその子ソロモンを呼び、イスラエルの神、主のために宮を建てるように彼に命じた。

28 章で、公の場でソロモンに宮の建設を命じますが、今は個人的に語っています。

22:7 ダビデはソロモンに言った。「わが子よ。私は、わが神、主の御名のために宮を建てようとする志を持ち続けてきた。22:8 ある時、私に次のような主のことばがあった。『あなたは多くの血を流し、大きな戦いをしてきた。あなたはわたしの名のために家を建ててはならない。あなたは、わたしの前に多くの血を地に流してきたからである。22:9 見よ。あなたにひとりの子が生まれる。彼は穏やかな人になり、わたしは、彼に安息を与えて、回りのすべての敵に煩わされないようにする。彼の名がソロモンと呼ばれるのはそのためである。彼の世に、わたしはイスラエルに平和と平穏を与えよう。22:10 彼がわたしの名のために家を建てる。彼はわたしにとって子となり、わたしは彼にとって父となる。わたしはイスラエルの上に彼の王座をとこしえまでも堅く立てる。』

ダビデが、どのように主に語られていたのか、ここの詳細が出ています。まず、彼は宮を建てたいと言う志を持っていました。これはまだ、主から来たものなのかどうか分かりませんが、ある時にはっきりと主からの語りかけがありました。それは、「あなたは建てることができない。しかし、あなたの子ソロモンが建てる。」というものです。

なぜか？ダビデが、多くの血を流し、大きな戦いをしてきたからだ、と言います。これはダビデの戦争行為が間違っていたことを意味していません。これまでの聖書記述で、主がダビデに戦いにおいて数々の勝利を与えられたことが書いてあります。そうではなく、神殿の象徴するものが平和と繁栄であり、ダビデはその象徴に合わないからです。ソロモンは、シャローム、平和または繁栄から派生した言葉であり、彼こそが平和と繁栄を象徴し、ゆえに神殿を建てるのにふさわしいと神は判断されました。

ダビデとソロモンは、それぞれキリストの働きを象徴しています。ダビデは、神の国が建てられるまで、主ご自身が悪に対して戦ってくださることを示しています。私たちキリスト者は、大なる霊の戦いの中に置かれています。教会そのものが霊の戦いの牙城です。「ハデスの門も、これに打ち勝つことはできない」と主はペテロに言われて、教会が死に打ち勝ち、後に悪魔のかしらを踏みつける権能を持っていることを教えられました。

そして私たちは天に入る時に安息に入ります。そして、世界はキリストが反抗する軍隊に対して戦われ、ことごとく滅ぼし、平和の君として君臨されます。その時には、キリストを王とする神の国が始まり、平和と繁栄が、海が満ちるように満ちることが約束されています。ですから、ダビデは戦うメシヤ、ソロモンは平和の君メシヤを象徴しているのです。

そして、ソロモンに対して、神が彼にとって父となり、彼にとって神が子となる、またその王座がとこしえに堅く建てられるという約束が与えられています。ダビデは歴代誌第一 17 章で、これがはるか先のことであると受け止めていました。けれども、ソロモンにおいても、究極的に現れるメシヤ、キリストを表す存在として、この約束が与えられていることが分かります。

22:11 そこで今、わが子よ、主があなたとともにおられ、主があなたについて語られたとおり、あなたが、あなたの神、主の宮をりっぱに建て上げることができるように。22:12 ただ、主があなたに思慮と分別を与えて、あなたをイスラエルの上に任命し、あなたの神、主の律法を守らせてくださるように。22:13 主がイスラエルについてモーセに命じられたおきてと定めをあなたが守り行なうなら、あなたは栄える。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。

すばらしい勧めであり、父からの命令です。これはまさに、モーセがヨシュアに激励した言葉と同じです。主から与えられた使命が自分の生前に果たすことができないので、その後継者にゆだねる勧めです。けれども、行われるのは共におられる主ご自身であり、私たちはイエスご自身が昇天されてからも、使徒たちと共に主がおられて、主ご自身の働きを彼らが行ったのを、使徒行伝で確認できます。そして、モーセがヨシュアに対して命令を行った時、それは約束の地で戦いを始めるためのものでしたが、今、ダビデがソロモンに対して命じている時、それは約束の地で戦いが集結し、平和を確立させるための大事業であることが対照的です。

どうでしょうか、私たちの教会に与えられている使命、また個々人に与えられている使命があって、それを成し

遂げるのに何が最も必要でしょうか？そうです、「主があなたとともにおられる」ということです。主は私たちに使命を与えられるだけでなく、その使命を果たすための手段も与えてくださいます。そして必要な、知恵と知識も与えてくださいます。ソロモンが若い時、主に願い求めたのは知恵と知識でした。若いのに、おびたしい数のイスラエル人を治めなければいけなかったからです。主は、その知恵を受け、さらに富も与えられました。

そして大事なものは、ヨシヤに対してと同じように、モーセの律法をことごとく守ることでした。これをソロモンは晩年捨ててしまい、歴代のユダの王もないがしろにする者たちが多くいました。けれども、ユダ後期の王ヨシヤは、神殿修復工事の中で発見された律法が読まれるのを聞きました。衣を裂いて、イスラエルが犯している罪に嘆き悲しみました。私たちキリスト者も同じです。何が重要か？と言えば、神の御言葉がすべての決断や判断の中にあるかどうか？であります。自分が何をしなければいけないのか、その具体的な判断に、神の御言葉があるかないかであります。それは、おみくじのように、言い当てるもの、言葉じりを合わせるものではなく、主の御心に自分を従わせる、しっかりと神の命令としての御言葉です。そうすれば、ソロモンに約束されたように、けれども物理的ではないですが、私たちも霊的な繁栄を経験できます。

22:14 見なさい。私は困難な中にも主の家のために、金十萬タラント、銀百万タラントを用意した。また、青銅と鉄はあまりに多くて量りきれない。それに、木材と石材も用意した。あなたが、これらにもっと加えてほしい。
22:15 あなたのもとには、石を切り出す者、石や木に細工する者、各種の仕事に熟練した者など、多くの仕事をする者がいて、22:16 金、銀、青銅、鉄を扱うが、その人数は数えきれない。立ち上がって、行かないなさい。主があなたとともにおられるように。」

ダビデは、困難な中でこれらの材料と職人を用意した、と言っています。決して楽ではなかったのです。私たちキリスト者も、主の働きに入るために困難を経験します。けれども、主は真実な方です。主が共におられるということは、困難がないことを意味しません。困難があっても、後ろを振り返ると、実に見事に主が備えてくださっているのを経験します。そしてダビデは、「立ち上がりなさい」と鼓舞しました。主のための新しい働きに、緊張し、不安になるかもしれません。けれども、立ち上がれば、主が力と知恵を与えてくださいます。

3 B イスラエルのつかさへの命令 17 - 19

22:17 そして、ダビデはイスラエルのすべてのつかさたちに、その子ソロモンを助けるよう命じた。22:18 「あなたがたの神、主は、あなたがたとともにおられ、周囲の者から守ってあなたがたに安息を与えられたではありませんか。主はこの地の住民を私の手に渡され、この地は主の前とその民の前に服したからです。22:19 そこで今、あなたがたは心を尽くし、精神を尽くして、あなたがたの神、主に求めなさい。立ち上がって、神である主の聖所を建て上げ、主の御名のために建てられた宮に、主の契約の箱と神の聖なる器具を運び入れなさい。」

ソロモンに個人的に語った後に、次はつかさたちに彼の事業を助けるよう命じました。助ける、支えるという働きは非常に重要です。その人が、ソロモンのように主によって示されたことを行なっているのであれば、全面的に

助け、支えることが必要です。このことによって、心を一つにして主の働きをすることができます。

2 A 礼拝奉仕の組織作り 23 - 26

次にダビデは、大規模な組織作りをします。祭司とレビ人を、どの奉仕につかせるかについての分担や役割を明確にさせます。

1 B 奉仕者登録 23

1 C 奉仕者の人数把握 1 - 5

23:1 ダビデは老年を迎え、長寿を全うして、その子ソロモンをイスラエルの王とした。23:2 ついで、彼はイスラエルのすべてのつかさ、祭司、レビ人を集めた。23:3 レビ人のうち、三十歳以上の者を数えたところ、ひとりずつ人数を調べた合計は三万八千であった。23:4 「そのうち、主の宮の仕事を指揮する者は二万四千、つかさとさばきつかさは六千、23:5 そして、四千人は門衛となり、四千人は私が賛美するために作った楽器を手にして、主を賛美する者となりなさい。」

ダビデは初めに、祭司とレビ人の人数を数えました。これはもちろん、21 章にある自分のエゴによる人数調査ではなく、主のものとしてされたことを表す人数把握です。奉仕につくことのできる者は、民数記 4 章 3 節で 30 歳から 50 歳までになっています。覚えていますか、イエス様はおよそ三十歳から公生涯を始められました。そしてユダヤ人指導者から、「あなたはまだ五十歳にもなっていないのに、アブラハムを見たというのか？」と問い詰められましたが、それはイエスが奉仕をするための律法、三十歳から五十歳の間にいられたことを示します。

そして、ダビデは主に三つの任務を、祭司とレビ人に課します。一つは主の宮の仕事、二つ目はつかさとさばきつかさです。彼らはエルサレムから離れたところでの庶務を行います。三つ目は門衛です。神殿の各所を守ります。それから四つ目が讚美であります。後の 24 章から 26 章は、各々の働きにおける分担が書き記されています。

しばしば、組織という言葉に嫌う人々があります。それは教会を硬直化させ、聖霊の働きを妨げるのではないかと、という懸念をもちます。いいえ、神は組織の神です。天地創造をされた時に、何も形がなかったところに、いろいろなものを造られて、区別をもうけ、「それは良かった」と評価されました。形あるもの、秩序あるもののできあがり、すべてを造られた後に、「これは実によかった」と言われているのです。そして、イスラエルが荒野の旅をしている時も、その幕屋の周りには宿営は、各部族がどこに天幕を張るのかその方角を示し、かつ移動する時は、どの部族から出発するのかの指示を神は与えられました。

そして新約聖書に飛びましょう。礼拝において、秩序があります。コリント第一 14 章を見れば分かります。神は、平和と秩序の神なのです。御霊の賜物を用いて、主に示された人が語り、預言をし、ある者は異言を語りますが、それぞれが順番に語り、異言においては、解き明かしがなければ語ってはならないと戒められてい

ます。そして礼拝において女性が発言するな、家で夫に聞きなさい、というものもあります。これは礼拝の席が男女に分かれており、礼拝の途中なのに妻が夫に、「これ、どういう意味なの？」と尋ねていたからです。他の章には、女性は預言をするとき、祈る時に被り物をしなさい、という文化的要素も教えています。なぜなら、コリントの町で被り物をしない女は売春婦だったからです。このように秩序がある時に神がそこにいてくださいます。

そして、黙示録に行ってみましょう。天における礼拝には、四つの、ケルビムと思われる生き物がおり、二十四人の長老がいます。非常に幾何学的、組織的な礼拝が持たれています。そして、そこに七つの霊、すなわち御霊もおられるのです。そして新しいエルサレムは、立方体、十二の門と十二の土台石、中央からの川など、まるで数学、幾何学の世界です。

したがって、聖霊の働きの中に秩序というものがあり、秩序を無視する動きはむしろ肉の働きでしかありません。コリントにある教会はこの混乱があり、それが御霊の働きという名のもので行われていましたが、パウロは肉の働きであるとしてしました。そして賜物が教会に与えられていますが、その一つが「指導する（ローマ 12:8）」です。あるいは「管理する」とか「監督する」と言い換えてよいと思います。

2 C 家系による組分け 6 – 2.3

23:6 そして、ダビデは彼らを組に分けた。レビ族を、ゲルシオン、ケハテ、メラリに分け、23:7 ゲルシオン人をラダンとシムイに分けた。

これからダビデは、レビ人と祭司を組分けします。具体的な奉仕について、それをある時期はこの組、その次はまた別の組というように、順番交代で奉仕をします。ここにあるように、その組分けはレビ族の氏族、また家族の単位で行われます。初めは、ゲルシオン族、そしてさらにそこからゲルシオンの息子たちに分けた組分けです。

そのような形で 12 節にはケハテ族の単位が書かれています。ケハテ族の中にモーセと兄アロンがおり、そのアロンの家系が祭司なります。13 節を読みます。「アムラムの子は、アロンとモーセ。アロンは、至聖所を聖別するために取り分けられた。それは、彼とその子らが、とこしえまでも主の前に香をたき、主に仕え、主の御名によって、とこしえまでも祝福するためである。」アロンの直系の息子たちから大祭司が選ばれ、彼らが主の前で香を焚き、また至聖所に年に一度入り、イスラエルの贖罪を行います。また人々の前に出て、御名によって民を祝福します。そして、21 節以降にメラリ族の子らの名が連なっていて、それぞれ氏族の単位で組分けがなされます。そして 24 節です。

3 C レビ人の働きの調整 24 – 3.2

23:24 これは、それぞれ父祖の家に属するレビ族で二十歳以上になり、主の宮の奉仕の仕事をした者であり、ひとりひとり、その名が数えられ登録された一族のかしらたちであった。

三十歳からの奉仕者を数えていましたが、神殿における礼拝の奉仕がたくさんあるからでしょうか、その年齢を二十歳以上に下げました。

23:25 ダビデがこう言ったからである。「イスラエルの神、主は、御民に安息を与え、とこしえまでもエルサレムに住まわれる。23:26 レビ人も、幕屋を運んだり、奉仕に用いるすべての器具を運んだりする必要はない。」23:27 これらは、ダビデの最後のことばに従って数えられた二十歳以上のレビ族の数である。

覚えていますが、レビ人の奉仕は、幕屋とその器具の運搬でした。民数記に書いてあります。けれども、もはや固定された神殿において、その奉仕は必要なくなりました。

23:28 彼らの役目は、アロンの子らを助け、庭のこと、脇部屋のこと、きよめて聖なるものとするに関する主の宮の奉仕をし、神の宮で奉仕をすることである。23:29 並べ供えるパン、穀物のささげ物である小麦粉、種を入れないせんべい、平なべ、混ぜ合わせたもの、また、各種の量や大きさを計ること。23:30 立って朝ごとに主をほめたたえ、賛美し、夕べにも同じようにすること。23:31 安息日、新月の祭りおよび例祭の時に、定められた数にしたがって絶やさずに主の前にささげる主へのすべての全焼のいけにえのこと。23:32 彼らは、会見の天幕の任務、聖所の任務、および、主の宮で奉仕をする彼らの同族アロンの子らの任務を果たさなければならない。

アロンの子らの助けをすることには変わりません。庭があります。脇部屋が聖所の脇にあります。また聖なること、パンなどを作る時にも関わります。聖なるパンですから、単なるパンではなくきちんとした調合が必要なのです。そしてこの他に、讚美があります。歌をうたいます。さらに、例祭や安息日の火による捧げ物を助けます。

2 B 祭儀 2 4

1 C アロン系祭司 1 - 1 9

24:1 アロンの子らの組分け。アロンの子らは、ナダブ、アビフ、エルアザル、イタマル。24:2 ナダブとアビフはその父に先立って死に、彼らには子どもがなかったので、エルアザルとイタマルが祭司の務めについた。24:3 ダビデは、エルアザルの子孫のひとりツアドク、およびイタマルの子孫のひとりアヒメレクと協力して、彼らをそれぞれの奉仕に任命し、それぞれの組に分けた。24:4 エルアザルの子孫のほうが、イタマルの子孫よりも一族のかしらが多かったので、エルアザルの子孫は、父祖の家のかしらごとに十六組に、イタマルの子孫は、父祖の家ごとに八組に分けられた。24:5 彼らはくじを引いて互いにそれぞれの組に分かれた。聖所の組のつかさたち、神の組のつかさたちは、エルアザルの子孫の中にも、イタマルの子孫の中にもいたからである。

23章は、すべての奉仕の構成員を示す、総合的なものでしたが、24章以降は各奉仕にしたがって、具体的な組分けを示します。初めは、聖所の中に入って、主の前に香をたく祭司たちの組分けです。ダビデの時代には祭司の数も多くなっていたので、すべての人に奉仕が回るようにするためにこの組分けは配慮していま

す。エルアザルの子孫とイタルの子孫のどちらもが、公平に奉仕につくことができるようにしています。これが、他の奉仕の組分けでも見ることのできる配慮です。出生や能力、年齢に関わらず等しく奉仕をする機会が与えられます。

そこで思い出すのが二つの御言葉です。一つは、ペテロ第一 2 章 9 節です。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」私たち皆が、キリストに対する祭司なのです。そして、もう一つがローマ 12 章 5 節です。「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」すべてがキリストの体の器官です。だれでも、キリストのうちにいる者は永遠の命にあずかっており、永遠の命にあずかっているのなら、それぞれが主にお仕えするように召されています。

24:6 レビ人の出の書記、ネタヌエルの子シエマヤが、王とつかさたち、および祭司ツアドクとエブヤタルの子アヒメレク、それに祭司とレビ人の一族のかしらたちの前で、それらを書きしるした。エルアザルの父祖の家を一つ一つ、イタルのを一つ一つ。

ダビデの前で、祭司たちの組分けが記録されます。7 節から 18 節までに書いてありますが、合計二十四の組分けです。一回につき一週間、六か月で一周し、一年で二周するという注解書の説明と、一回につき二週間、それで一年で一周するという説明の二つがありました。興味深いのは、この組分けが新約時代にも続いていたことです。第八のアビヤ（10 節）の組ですが、バプテスマのヨハネの父、ザカリヤがその組でした。「ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの組の者でザカリヤという祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといた。ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行なっていた。エリサベツは不妊の女だったので、彼らには子がなく、ふたりとももう年をとっていた。さて、ザカリヤは、自分の組が当番で、神の御前に祭司の務めをしていたが、祭司職の習慣によって、くじを引いたところ、主の神殿にはいって香をたくことになった。彼が香をたく間、大ぜいの民はみな、外で祈っていた。（ルカ 1:5-10）」

2 C その他のレビ人 20 – 31

そして 20 節以降に、「残りのレビ族については」とありますが、ケハテ族の中でアロンの家系ではない人々、アムラムの子孫を列挙しています。そして、奉仕の平等性を再び強調しています。31 節です。

24:31 彼らもまた、彼らの同族であるアロンの子らと全く同じように、ダビデ王とツアドクとアヒメレク、および祭司とレビ人の一族のかしらたちの前で、くじを引いた。一族では、かしらもその弟と全く同じであった。

アロンの家系ではなくとも、同じようにくじを引き、また、兄も弟も平等にくじを引きました。

3 B 讚美 25

1 C 歌と預言 1-8

25:1 また、ダビデと將軍たちは、アサフとヘマンとエドトンの子らを奉仕のために取り分け、立琴と十弦の琴とシンバルをもって預言する者とした。その奉仕に従って、仕事についた者の数は次のとおりである。25:2 アサフの子では、ザクル、ヨセフ、ネタヌヤ、アサルエラ。これらはアサフの子で、王の指揮に従って、預言するアサフの指揮下にあった。25:3 エドトンについて。エドトンの子は、ゲダルヤ、ツェリ、エシャヤ、シムイ、ハシャブヤ、マテイヤの六人。立琴をもって主をほめたたえ、賛美しながら預言する彼らの父エドトンの指揮下にあった。

讚美の奉仕が選定されています。アサフとヘマンとエドトンの子孫がそれぞれ取り分けます。興味深いのは、この取り分けにダビデ以外に將軍たちが関わっていることです。軍事的指導者がなぜ、歌うたいや楽器を奏でる者たちに関わるのでしょうか？その後の歴代誌の話で分かることは、戦いにおいて、その最前線で彼らが讚美したということです。ヨシャパテが戦うときの記録です。「それから、彼は民と相談し、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に行き、こう歌うためであった。「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。（2歴代 20:21-22）」

ここに、イスラエルの民が単なる人間の国ではなかったことをよく表しています。彼らは神の民であり、御霊に属する民なのです。戦いにおいて讚美を前線に置くなど、もつての他です。しかし、彼らの戦いは、彼らの戦いではなく神の戦いであり、それゆえ主を礼拝して讚美するところに敵が減びるのです。使徒パウロは言いました。「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。（2コリント 10:4）」

そして次に興味深いのは、彼らが楽器をもって賛美の歌を導いている時、同時に預言を行うことです。先ほどのヨシャパテ王の戦いにおいて、アサフ族の者に神の霊が下って預言を行っています。「ときに、主の霊が集団の中で、アサフ族の出のレビ人ヤハジエルの上に臨んだ。彼はマタヌヤの子エイエルの子ベナヤの子ゼカリヤの子である。彼は言った。「ユダのすべての人々とエルサレムの住民およびヨシャパテ王よ。よく聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられます。『あなたがたはこのおびたしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。あす、彼らのところに攻め下れ。見よ。彼らはツイツの上り道から上って来る。あなたがたはエルエルの荒野の前の谷のはずれで、彼らに会う。この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる。』」（2歴代 20:14-17）」

すばらしい励ましの言葉ですね。このように、讚美また歌の中で、神の御霊に動かされて、預言を語るという

奉仕があります。カルバリーチャペルでは、「アフターグロー」という集会を持ちます。聖霊がご自由に働いていただき、御霊の賜物を用いながら、預言を行なったり、詩篇を朗読してみたり、その時に示された言葉を発するのです。そして、癒しの必要な人のところに集まって祈り、または隣の人と共に祈ったりして、主からの働きかけ、御霊に触れられることを求めます。その時に行うのが、讚美です。讚美に時間をたくさん過ごします。コリントにある教会も、同じことを行っていました。「あなたがたが集まる時には、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かしたりします。そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい。（1コリント 14:26）」

そして、そのレビ人の名前ですが、「アサフとヘマンとエドトン」ですが、いずれも詩篇の表題に出てくる讚美の指揮者の名前です。ですから詩篇は、ダビデの他にこれら礼拝讚美を導く者たちが歌を導いたものを掲載したものです。

25:4 ヘマンについて。ヘマンの子は、ブキヤ、マタヌヤ、ウジエル、シェブエル、エリモテ、ハナヌヤ、ハナニ、エリヤタ、ギダルティ、ロサムティ・エゼル、ヨシュベカシャ、マロティ、ホティル、マハジオテ。25:5 これらはみな、神のことばに従って、角笛を高く上げる王の先見者ヘマンの子らであった。神はヘマンに息子十四人と、娘三人を与えられた。25:6 これらはみな、その父の指揮下にあつて、シンバル、十弦の琴、立琴を手に、主の宮で歌を歌って、王の指揮の下に神の宮の奉仕に当たる者たちである。アサフ、エドトン、ヘマン、25:7 彼らおよび主にささげる歌の訓練を受けた彼らの同族・彼らはみな達人であった。・・の人数は二百八十八人であった。25:8 彼らは、下の者も上の者も、達人も弟子も、みな同じように任務のためのくじを引いた。

ヘマンの子らは特別な働きをしていました。王自らが指揮をして、また父ヘマンの指揮によって素晴らしい歌を捧げていました。カルバリーチャペル・コスタメサの教会の礼拝に、スコット・カニングハムという礼拝讚美担当の牧師がいます。彼は娘二人を自分のバンドの中に入れていますが、まだ高校生ぐらいではないでしょうか、非常に優れた歌唱力です。似たように、音楽の賜物が与えられていました。

そして再び、任務の平等性が強調されています。下の者も上の者も、達人も弟子も、同じようにくじを引きました。

2 C 二十四の組分け 9 - 30

そして9節から30節までに、祭司の組分けと同じように二十四の組分けを与えました。興味深いことに、天において、立琴を奏でて新しい歌をうたっている二十四人の長老がいます。「彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっぱいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。彼らは、新しい歌を歌って言った。（黙示録 5:8-9）」この長老たちは、おそらく教会の代表者であろうと考えられます。私たち教会の働きは、天に引き上げられても讚美

と礼拝なのです。

4 B 執事的奉仕 26

26章は、もっと実際的な奉仕に関わります。1節から19節までは門衛、20-28節は宝物倉の管理、そして29節以降が外の仕事です。教会では「執事」と呼ばれるものです。預言や讃美、また祭儀などは霊的な事柄ですが、同じように執事、実際的な事柄は主の前で貴いものです。掃除、案内、会計、新来者への挨拶、物運びなど、数多くの執事的働きがあります。

1 C 門衛 1-19

26:1 門衛の組分け。コラ人ではアサフ族のコレの子メシェムヤ。

アサフ族とありますが、先ほどのアサフとは別人です。

26:2 メシェムヤには子どもがあった。長男ゼカリヤ、次男エディアエル、三男ゼバデヤ、四男ヤテニエル、
26:3 五男エラム、六男ヨハナン、七男エルエホエナイ。26:4 オベデ・エドムには子どもがあった。長男シエマヤ、
次男エホザバデ、三男ヨアフ、四男サカル、五男ネタヌエル、26:5 六男アミエル、七男イッサカル、八男ペウルタイ。神が彼を祝福されたからである。

オベデ・エドムは、あのオベデ・エドムです。ダビデが神の箱をキリヤテ・エアリムから運び出した時に、ウザの割り込みで彼が打たれて死んでしまい、このままでは神の箱を自分のところにお迎えすることはできないと判断しました。そこで、オベデ・エドムの家に安置しました。すると、その家が三か月間、祝福されたのです。「こうして、主の箱はガテ人オベデ・エドムの家に三か月とどまった。主はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された。（2サムエル 6:11）」その祝福の具体的内容は、ここにあるようにたくさんの子でありました。

26:6 彼の子シエマヤに子どもたちが生まれた。彼らは勇士だったので、その父の家を治める者となった。26:7 シエマヤの子は、オテニ、レファエル、オベデ、エルザバデ。彼の兄弟は勇者、エルフとセマクヤ。26:8 これはみな、オベデ・エドムの子たちで、彼らとその子、兄弟たちは、その奉仕にふさわしい力のある勇敢な人であった。オベデ・エドムに属する者は六十二人であった。26:9 メシェムヤには子どもと兄弟たちがあり、彼らは勇者で、十八人であった。26:10 また、メラリ族のホサには、子どもがあり、そのかしらはシムリであった。彼は長男ではなかったが、父が彼をかしらにしたからである。26:11 第二はヒルキヤ、第三はテバルヤ、第四はゼカリヤであった。ホサの子ども、兄弟たちは合計十三人であった。

勇士であった、とありますが、彼らは門衛ですから、ガードマンの役割も果たしていました。門衛といえども、それは霊的な働きです。神殿において、聖なるものと俗なるものの区別がありました。聖別されている者でなければ、入ることのできない境界がありました。それを守っているのです。ですから、自分に霊的識別力が試されます。教会においては、案内係がそれに当たります。いろいろな人々が教会を訪れます。その時に話しかける

言葉、案内する席、いろいろなことが霊的判断を必要とする行為です。

26:12 門衛のこれらの各組に対し、主の宮で仕える任務が、彼らのかしらごとに、彼らの兄弟たちと全く同じように割り当てられた。26:13 こうして、彼らは、下の者も上の者もひとしく、その父祖の家ごとに、一つ一つの門についてくじを引いた。26:14 すると、東方のくじはシェレムヤに当たった。彼の子で思慮深い議官ゼカリヤのためにくじが引かれ、彼のくじは北方と出た。26:15 オベデ・エドムには南方、彼の子らには倉、26:16 シュピムとホサには西方、それに上り坂の大路のシャレケテ門が当たった。見張りの組と組とは並び合っていた。26:17 東方には六人のレビ人、北方には毎日四人、南方には毎日四人、倉にはふたりずつ、26:18 西方の前庭には、大路に四人、前庭にふたりであった。26:19 以上は、コラ族とメラリ族の門衛の組分けである。

それぞれの門における、門衛です。一見、卑しい奉仕のように見えますが、とてつもない特権でした。このことを詩篇で、コラの子たちがこのように歌っています。「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。（詩篇 84:10）」そして、新天新地の都、天のエルサレムにおいても、門衛がいます。その門衛は御使いです。「都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。（黙示 21:12）」ですから、門衛、また教会の案内係、または教会外の人々と教会を代表して接触する人々は、このような霊的権威を帯びて奉仕をします。

2 C 宝物倉管理 20 – 28

26:20 レビ人のアヒヤは、神の宮の宝物倉および聖なるささげ物の宝物倉をつかさどった。26:21 ゲルシオン族でラダンに属するラダンの子ら、ゲルシオン人ラダンに属する一族のかしらたち、すなわちエヒエル人、26:22 エヒエル人の子孫、その兄弟ゼタムとヨエルは、主の宮の宝物倉をつかさどった。26:23 アムラム人、イツハル人、ヘブロン人、ウジエル人については、26:24 モーゼの子ゲルシヨムの子シェブエルが宝物倉のつかさであった。26:25 彼の同族で、エリエゼルに属する者は、その子レハブヤ、その子エシャヤ、その子ヨラム、その子ジクリ、その子シエロミテであるが、26:26 このシエロミテと彼の兄弟たちは、ダビデ王と一族のかしらたち、および、千人隊の長、百人隊の長たち、将軍たちが聖別してささげた聖なるささげ物のすべての宝物倉をつかさどった。26:27 彼らは、戦いで得た分捕り物を、主の宮を修理するために聖別してささげた。26:28 すべて予見者サムエル、キシユの子サウル、ネルの子アブネル、ツェルヤの子ヨアブが聖別してささげた物、すなわち、すべての聖なるささげ物は、シエロミテとその兄弟たちにゆだねられた。

宝物倉の管理です。これまで将軍ら、軍人たちが分捕り物として取ってきたけれども、主に聖別してささげた金銀をここに保管し、管理します。なんと貴い奉仕でしょうか！教会にはもちろん、会計の奉仕があります。実に細かい作業、目立たない作業ではありますが、これだけ主の前では貴いことであり、重要な働きであります。

3 C 外の仕事 29 – 32

26:29 イツハル人のうち、ケナヌヤとその子らは、イスラエルに関する外の仕事につき、つかさとさばきつかさとなった。26:30 ヘブロン人のうち、ハシャブヤとその同族の者は勇者であり、千七百人いたが、ヨルダン川を渡った所から西方に至る地域のイスラエルの管理に当たり、すべての主の仕事、王への奉仕に当たった。26:31 ヘブロン人のうち、エリヤは、その一族その家系によるヘブロン人のかしらであった。ダビデの治世の第四十年に、彼らは調べられ、そのとき彼らのうちにギルアデのヤゼルで勇士が見いだされた。26:32 彼の同族の者たちは勇者であって、二千七百人いたが、一族のかしらたちであった。ダビデ王は彼らを、ルベン人、ガド人、マナセ人の半部族の上に任命し、すべて神に関する事がら、王に関する事がらに当たさせた。

神殿ではなく、イスラエルの領土内で、王に関する事柄と神に関する事柄を取り扱う者として、諸々の事項を取り扱います。これも、もちろん重要な務めです。私たちにも、教会中ではないけれども、キリストの教会のために行っている、世における奉仕というのがあります。例えば、教会がどこかの場所を借りているのであれば、その不動産屋との契約や更新、その他の手続きがあるでしょう。修養会のために、公共の施設を借りるのであれば、信者ではない人々との話があります。このような時に、教会を代表して、かつキリストの証しとなるよう配慮しながら事を進めなければいけません。

今回は、祭司やレビ人ではない、一般のイスラエル人兵士たちも部隊による交代制を敷いている話から始まります。いかがでしょうか、どの部分も決して劣っていることではなく、みなが尊いのです。神の家の重要な部分を占めています。そこで、主にあって誇ってください。自分は主に対して仕えているという、大きな自負を持ってください。神はその働きを祝福されます。すべての人が関わってこそその神の家であります。